

絶対的に〈他なるもの〉であるなにものかとの関係である。それはつまり、抵抗をもたないものの抵抗、倫理的な抵抗なのである。

(レヴィナス, 熊野純彦訳『全体性と無限』下巻 岩波文庫)



4 公共性と正義

▶ pp.129 ~ 134

活動 —アーレント

活動 action とは、物あるいは事柄の介入（かいにゅう）なしに直接人と人との間で行われる唯一の活動力であり、多数性という人間の条件、すなわち、地球上に生き世界に住むのが一人の人間 man ではなく、多数の人間 men であるという事実に対応している。たしかに人間の条件のすべての側面が多少とも政治に係わっている。しかしこの多数性こそ、全政治生活の条件であり、その必要条件であるばかりか、最大の条件である。……もし、人間というものが、同じモデルを際限なくくり返してできる再生産物にすぎず、その本性と本質はすべて同一で、他の物の本性や本質と同じように予見可能なものであるとするならば、どうだろう。その場合、活動は不必要な贅沢（ぜいたく）であり、行動の一般法則を破る気まぐれな介入にすぎないだ

ろう。多数性が人間活動の条件であるというのは、私たちが人間であるという点ですべて同一でありながら、だれ一人として、過去に生きた他人、現に生きている他人、将来生きるであろう他人と、けっして同一ではないからである。

(アーレント, 志水速雄訳『人間の条件』ちくま学芸文庫)

新しい野蛮状態 —フランクフルト学派

じつのところ、われわれが胸に抱いていたのは、ほかでもない。何故に人類は、真に人間的な状態に踏み入っていく代わりに、一種の新しい野蛮状態へ落ち込んでいくのか、という認識であった。

(ホルクハイマー, アドルノ, 徳永恂訳『啓蒙の弁証法』岩波書店)

対話的理性 —ハーバーマス

コミュニケーション的理性によって規定された主体性は、自己保存のために自己の本性が奪われることに抵抗する。コミュニケーション的理性は、道具的理性のように、盲目の自己保存に、無抵抗に包摂（ほうせつ）されることはありえない。自己保存的主体は、表象（ひょうしょう）し行為しつつ、さまざまな客体にかかわる。もしくは環境から自己を区切ることで存立維持をはかるシステムにかかわる。それに対して象徴的に構造化された生活世界は、その成員の解釈

の作業のうちに構成され、ただコミュニケーション的行為を通じてのみ再生産される。コミュニケーション的理性がかかわるのは、自己保存的主体ではなく、このように象徴的構造をもつ生活世界なのである。

(ハーバーマス, 川上倫逸ほか訳『コミュニケーション的行為の理論』未来社)

原初状態 —ロールズ

〈公正としての正義〉において、伝統的な社会契約（けいやく）説における〈自然状態〉に対応するのが、平等な〈原初状態〉(original position) である。言うまでもなく、この原初状態は、実際の歴史上の事態とか、ましてや文化の原始的な状態とかとして考察されたものではない。ひとつの正義の構想にたどり着くべく特徴づけられた、純粹に仮説的な状態だと了解されている。この状況の本質的特徴のひとつに、誰も社会における自分の境遇（きょうぐう）、階級上の地位や社会的身分について知らないばかりでなく、もって生まれた資産や能力、知性、体力その他の分配・分布においてどれほどの運・不運をこうむっているかについても知らないというものがある。さらに、契約当事者たち (parties) は各人の善の構想やおのおのに特有の心理的な性向も知らない、という前提も加えよう。正義の諸原理は、〈無知のヴェール〉(veil